マダム見聞録

No. 5 フィジーの村事情

藤井由佳（協同総合研究所）

フィジーの人々は村をつくって、集団で生活しています。約150年前までは人食いも行われていたというくらいなので、村を一歩出れば敵ばかりという生活をしてきた彼らにとって、村内の秩序を保ち、団結することは必須でした。そこで今回は、村で生活するときに絶対に知っておいたほうが良い「村の掟」を紹介します。なかには、奇妙に思えるものもありますが、日本の常識だって世界の非常識かもしれない。お互い様なのです。

フィジーの伝統的な家

フィジーの村事情

村の掟　その１
肌を露出した服装は好ましくない。

男性も女性も、スルと呼ばれる布を腰に巻くのが普段着である。スルはふくろはぎにかかるほど長く、巻きスカートのようなもの。上半身は、肩を見せない袖のある服を着るようにする。リゾート観光客がよく着ているキャミソールはあまりにも肌の露出が高いので、着てはいけない。

スル姿の男性

ズボンもスカートも、西洋からもたらされたもので、フィジーの伝統にそぐわないとされている。最近では、普段着については決まりもゆるくなり、男性も女性もズボンを履いている姿をよく見かける。しかし、それは村の外にいるときであって、村の中に入るときはズボンの上からスルを巻いてからという人も多い。また、教会に行くときには一番良い服を着ていく。男性はスルを身に付け、ワイシャツにネクタイ。女性はロングドレス。

村の掟　その２
家の中では立っていてはいけない。

家の中に入るときは、入口で履物を脱ぎ、すぐに座る。あぐらをかくのが正式。女性は横座りでもよい。移動しなくてはいけないときは、立てひざをして低姿勢の状態で、しずしずと「チロ、チロ (tilou, tilou)」と言いながら移動する。「ちょっとすみません」と

いうニュアンスである。また、人が座っているところを横切るときは、その人の後ろではなく前を通る。

座っている人のそばで立っていることは、攻撃をしやすいというイメージを与えてしまい、相手に失礼である。同様に、人の後ろを通るということは、後ろから攻撃をしかけるのではないかという不安を与えてしまう。

村の掟　その３
人の頭や髪の毛を触ってはいけない。

頭や髪の毛は神聖なものとされていて、勝手に触ることができない。日本ではよく見る、叱っているときや、ボケを突っ込むときに頭を叩く光景は、フィジーでは見ることがない。フィジーの子どもはよくお尻を叩かれている。

村の掟　その４
「カナ」と言われたら、「ビナカ」と応える。

カナ(kana)はフィジー語で「食べる」、ビナカ(vinaka)は「ありがとう」。家のドアや窓は開け放しなので、歩いていると食事中の人たちと目が合うことがあるが、そのときに必ず「カナ！」と言われる。「食べていきなさい！」という意味である。これは、本当に誘っているというよりも、あいさつのような意味合いのほうが強く、「ビナカ（ありがとう）」と言って断るのが普通。もちろん、親しい仲であれば、本当に食べに行ってもよいが、大抵は断る。遠慮をするのが美徳とされる。

初めの頃、何もわからなかった私は、せっかく誘ってくれたのだからと思い、お腹もすいてないのに誘われるままに食べ、違うところでまた呼ばれて食べ･･･、という疲れる付き合い方をしていた。誘ったほうは、「本当に食べに来ちゃったよ。」と思っていたかもしれない。

村の掟　その５
村に勝手に入ってはいけない。

実際に村を訪問することになったら、上記１から４のような基本的マナーを頭に入れた上で、村へ行く準備をする。「一見さんお断り」ではないが、誰も知っている人がいない村に勝手に入っていくことはできない。村に入るには、必ず村長や長老の許可が必要なので、彼らに会えるように根回しをする。そして、カバというコショウ科の木を手みやげに、セブセブという儀式を受けなくてはいけない。

村の掟　その６
セブセブ（カバの儀式）

フィジーの島々を訪れ、上陸して入村するときには、セブセブと呼ばれる儀式を受けるのが慣わしである。それを受けなければ、村に宿泊することはもちろんのこと、ウロウロすることも許されない。逆にこの儀式さえ受ければ、村の仲間として迎えてもらうことができる。本来は、戦闘を交わした相手と不戦の誓いをする時や、客を歓迎する時に行われてきたセブセブ。今はもっぱら歓迎の意味で行われる。

カバ(kava)というのはコショウ科の木のことで、フィジー語でヤンゴナ(yaqona)という。植えてから3、4年経ったカバの根を掘り返して乾燥させ、鉄棒で打ち砕いて粉末にする。この粉を布袋に入れ、水の中で揉みしごいて汁を出す。これをココナッツの殻ですくって回し飲みをする。作って飲むところまでが一定の作法に従って行われ、この一連

タノアに入ったカバ

乾燥したカバの根を打ち砕いている様子

の儀式をセブセブという。

セブセブに不可欠なのが、タノアといわれる木の器。木をくりぬいて作る。大きなものから小さなもの、木彫りの模様のあるものまで様々な種類があり、一家にひとつあるといっていい。余談だが、フィジーの家庭の三種の神器は、テレビ、冷蔵庫、タノアかもしれない。セブセブほど形式にこだわらない形で、客が来ても来なくても、カバは人々に日常的に飲まれているのだ。

儀式はまず、迎える側と迎えられる側が向き合ってあぐらをかいた状態で座るところから始まる。迎える側は、村で一番偉い村長または長老を中心に、歓迎の辞を述べる者、カバを作る者、カバを振舞う者、その他の者がそれぞれ定められた位置に座る。迎えられる側も、代表者を中心にして並んで座る。その時にカバは、代表者の目の前に出されている。フィジー人同士なら、自己紹介や村に入る目的などを話しながらカヴァを渡す。セブセブは必ずフィジー語で行うものなので、フィジー語のわからない客の場合は、世話役のフィジー人が代わりに行うか、その部分が省略される。カバが渡されると、迎える側から歓迎のあいさつがあり、終了すると皆で手拍子を打って歓迎の意を表す。その後、タノアの前にいる男が隣の男に水をかけてもらいながら、カバを作りはじめる。客が差し出したカバは、根っこのままの状態なので、実際に飲むために使われるカバは、あらかじめ迎える側が用意したものである。従って、このセブセブという儀式は、事前の根回し無しには行えない。こういうところに、フィジー人の国民性がうかがえると思う。

カバが作り終わると、まず、客の代表者に振舞われる。ココナッツの殻に入ったカバを受け取るときに、手を一回、パンと叩く。そして「ブラ（こんにちは）」と言って受け取り、両手を使って一気に飲み干す。飲み終わったら、三回手を叩く。「ビナカ（ありがとう）」と言いながら、殻を返す。これを儀式に参加している人、ひとりひとりに繰り返す。代表者が一通り飲み終えたら、場は和みはじめ、「どこから来たんだ？」「フィジーは好きか？」などと世間話が始まる。しばらくすると、同じ順番で二杯目のカバが振舞われる。場はずっと和んだままである。

肝心のカバの味は、決しておいしいものではない。見た目は、壁土を溶かしたような泥水で、味は、胃薬を溶かした用で薬臭く、濃いものだと舌の先がしびれる。漢方薬のようなものを想像していただければよい。大量に飲むと、二日酔いのような状態になるが、アルコール分は一切含まれていない。飲めば飲むほど鎮静効果で気分が沈んでく

る。カバラクトン類(kavalactones)と呼ばれる植物化学物質が鎮静、催眠作用を脳波にもたらし、脳の大脳辺縁部の深層に働きかけるとされている。本来、戦争していた相手と休戦が成立して仲直りするようなときに飲むのだから、気分が高揚しては困るのだ。

しかし、こんな飲物を飲んでも体に悪影響はないのか。フィジー人は、“Kava is good for health.”などと言って、たくさん飲むように勧める。だが、カバを飲みすぎると腕の皮膚がかさかさになるとも言われていて、実際にそうなっているフィジー人をよく見かけた。

フィジーで開催された太平洋カバ研究シンポジウムにおいて、南太平洋大学薬学部のスブラマニアン・ソテスワラン教授が、カバにはガン抑制力があると発表した。また、太平洋地域以外では、カバはピルや酒類に混ぜて、ガン抑制、ストレス解消、不眠症の治療薬として使用されている。

ある健康食品販売のホームページでは、カバについて下記のように紹介している。

しかし、財団法人日本医薬情報センター（JAPIC）の発表では、カバから作った健康食品が原因で劇症肝炎になって死亡したり、肝移植を受けたりした報告が海外で相次いでいることが報告されており、現在日本では、カバは医薬品成分となり、カバを含んだ製品は医薬品となっている。そして、すでに輸入も販売も禁止されている。

あんなに毎晩カバを囲んでいるフィジー人も、カバはおいしくない、ビールのほうがおいしい、と言っている。飲み干したあと、まずそうな顔をして、皮膚がかさかさになるまで飲んで、良いことがないように思えるけれど、なぜやめないのか。それは、伝統を重んじる彼らの国民性もあるかもしれないが、カバを飲むという名目で、村人が集まっておしゃべりをする、あの独特の雰囲気を、結局みんなが好きだからやめないのだろうと思う。

【カバの効能】

精神の鋭敏性を低下させることなくストレスを和らげます。神経系統に働きかけ、不安や意気消沈した気持ちをリラックスさせます。そのリラックス効果により、快適な眠りをもたらします。さらに筋肉痛などの痛みを和らげる働きもあります。木の根の部分に存在するカバラクトンは、GABA（自然に存在するアミノ酸）の合成をアップさせます。GABAは脳が合成する神経伝達物質のひとつで、人を落ち着ける効果があります。

番外編：大わらじ委員会のみなさんとフィジー人

長野県千曲市上山田には、稲の豊作を祈って神社に奉納する大わらじを作っている「上山田大わらじ委員会」のみなさんがいる。同委員会は、『いま「協同」を拓く2004全国集会 in ながの』の実行委員会にも参加して下さっていて、集会当日のオープニングでは、古代稲で作成した大わらじを担いで登場する。わらじ作りに使う古代稲の田植え、稲刈りが協同集会のプレ企画として位置づけられ、私も参加させていただいた。そして先日、大わらじ作成という最後の大仕事が行われた。

〈日本〉

仕事はすべて協同で行われる。ひとつのわらじをみんなで作る。昔からの友達で、今も○○ちゃんとニックネームで呼び合い、冗談を言ってからかいながら作業が進む。「委員長、これでいいんかいな。」「これじゃ、ゆるすぎるな。」「まだまだ修行が足りないな。」アハハハハ。「そっちはどこまで終わったんか。」「どこまでって、やったとこまで終わっただけだ。」アハハハハ。

時間が来ると、奥様たちが用意してくれたお菓子やお料理で休憩。「そろそろご飯にしてくださーい。」と呼んでくれる。休憩場所にはゴザが敷いてあって、みんなは大きな円を作って座る。あぐらをかく。料理は家から持ち寄って、大皿に盛りつけてある。委員長の言葉にはみんなが耳を傾ける。誰かが冗談を言うと、みんなで笑う。すぐそばの道を近所の人が通りかかった。「お昼は食べたんかい。こっち来て一緒にどうぞ。」

誰か一人が欠けたら心配するけれど、誰かが増えるのには全くかまわない。私も甘えて一緒にお昼をごちそうになった。私のことを誰かわからなかった人もいたと思うけれど、みんな受け入れてくれている。

〈フィジー〉

この感じ、なんだかとても懐かしいと思ったら、それもそのはず、フィジーの村の様子とそっくりだった。大勢が集まって、一緒に食べて飲んで笑う。そんな場所を必要とする心は、国や人種に関係ない。フィジー人も日本人も同じだ。

ただひとつだけ違うのは、大わらじ委員会のみなさんは、フィジー人のように一度休憩したら起き上がらないのではなく、働き者だということ。

Vinaka na kakana.**（ビナカ ナ カカナ）おいしい食事をありがとうございます。**